

TC カレッジ技術職員交流会

1. はじめに

TC カレッジとは、Science Tokyo（東京科学大学）が2021年4月に発足した高度技術職員養成制度である。この取り組みに九州工業大学も連携し、TC カレッジのサテライト校として新規コースの開設を予定している。この準備の一環で、下記の日時に社会実装本部主催で「TC カレッジ・技術職員交流会」と題した情報交換会を実施した。TC カレッジに関わる他大学の技術職員を招待して、各大学の取り組みを発表いただき、本学の技術職員と意見交換を行った。

日時：2025年9月17日（水）13:00-16:00

場所：戸畑キャンパス GYMLAB0、他

2. TC カレッジ 運営に関する意見交換会

技術職員交流会の前に、Science Tokyo の柁見吉朗様、高橋久徳様、清悦久様と、九州工業大学管理本部技術部の荒川等、富重真理の5名で、TC カレッジの運営に関する意見交換会を実施した。

現在、TC カレッジ・サテライト校の新規コース開設に向けての会議を、隔週火曜に1時間、定例で開催しているが、コースの運営に関してはさらに詳細な情報収集が必要で、TC カレッジの運営担当者に直接お話を聞ける良い機会となった。カリキュラムの単位認定基準、KPI の設定、自走可能な持続性のあるカリキュラム構成、受講生からの質問対応、等、各コースの取組や苦勞されていることを意見交換でき、有益な情報を得ることができた。テクニカルコンダクター（TC）の称号を得るためにはTC 論文が必須で、「コースの受講生に何を学んでもらいたいのか、カリキュラムからTC 論文を生み出すことができるかをイメージしてコースを構築するとよい」、というアドバイスをもとに、引き続き新規コースの具現化を目指して準備を進めていきたい。



図1 TC カレッジ 運営に関する意見交換会の様子

3. TC カレッジ 技術職員交流会

本学の米澤恵一朗副理事による開会の挨拶で交流会がスタートした。最初に九州工業大学建学の精神への言及があり、大学で見出された知を社会へと届ける使命についてお話しいただいた。国立大学再編の時代にあって、技術職員に九州工業大学が学術という知的好奇心探求活動の拠点となる上での協力が求められた。また、こうした取り組みをサポートする技術職員もワクワクして自らのリスクリング等に励み、本日の Science Tokyo・北海道大学・九州工業大学における交流会を十分に活用して欲しいとのご挨拶をいただいた。

開会のご挨拶の後、TC カレッジについて、北海道大学（技術部）の活動報告、Science Tokyo（技術部）の活動報告、九州工業大学（技術部）の活動報告、最後に意見交換が実施された。

「TC カレッジについて」では Science Tokyo の栢見吉朗様が登壇され、最初に自己紹介と TC カレッジのマネージメントについてお話しいただいた。次に、TC カレッジ概要として、TC カレッジは高度技術人財であるテクニカルコンダクター (TC) を養成するシステムである事が説明された。設備共用化に伴ない設備を十分に稼働させる人財の養成がイノベーション創出に必要であるというモデルの説明があった。TC カレッジの設立趣旨、カリキュラムについて言及があり、Science Tokyo での人事戦略と TC 制度の関係が示された。さらに、TC カレッジの全国ネットワークの説明があった。TC カレッジの仕組みとして、運営体制についての説明、コースの紹介、必要単位数、在籍可能年限、年間スケジュール、費用等の説明をしていただいた。また、TC 論文の審査制度に関する点として、「TC 論文と博士論文の相違点」、「TC 論文構成について」、「申請・審査フローについて」、「これまで認定された論文」の紹介があった。最後に広報関係のご案内としてパンフレットの案内をしていただいた。

続いて、北海道大学（技術部）の活動報告では、北海道大学の中村晃輔様、武井将志様にご登壇いただき、試作ソリューションの取り組みについてお話ししていただいた。最初に、北海道大学、機器や技術職員の共用・協同をすすめたグローバルファシリティセンター (GFC) の紹介をしていただいた。北海道大学には 234 名の技術職員が在籍しているが、一般に技術職員という職は安定している一方成長モチベーションを維持するかの課題があるとの言及があった。北海道大学の特徴として組織が大きいので一元化しても部局毎に異なる組織上の性質があるが、近年一元化の動きが実質化しつつあると説明された。また、人材不足、情報不足、人事採用面での問題点が示された。そのため組織一元化により、研究しやすい環境作りへの取り組みが実施されている事が話された。さらに 2016 年に GFC が発足し、機器共用と技術職員の組織化が実行された。5 つの事業が立ち上がり、その 1 つが試作ソリューション事業との事であった。試作ソリューション事業の紹介をしていただいた。貢献・強みを自覚し伸ばす・人的資源継承を軸に話が展開された。9 名の少数精鋭で活動している事も話された。技術向上と価値を最大化するポイントが説明された。そして、その中で、実際に手を動かす取り組み事例をご紹介いただいた。最後にまとめとして、市場・人財・財務という観点で価値を説明していただいた。今後の構想についてもお話ししていただいた。

そして Science Tokyo（技術部）の活動報告は、Science Tokyo の高橋久徳様にお話ししていただいた。「自己紹介」、「技術職員組織の変遷」、「コアファシリティ構築事業」、「リサーチインフラ・マネジメント機構について」、「最後に」、という構成でお話ししていただいた。コアファシリティ事業の 1 つとして TC 制度が発足した事等が説明された。人財と設備の両方を強化する事でのイノベーション創出モデルについても説明された。Science Tokyo の人事制度に関する説明があった。リサーチインフラ・

マネジメント機構に関する説明があった。 Science Tokyo となって1年程度経過し、理工学系、医歯学系の相違を整理し、風通しの良い職場環境構築を目指すとの事で報告が締め括られた。

最後に九州工業大学（技術部）の活動報告を九州工業大学管理本部技術部長の荒川が報告した。九州工業大学ビジョン2040に沿った取り組みについて、J-Peaks やTC カレッジとの関係が説明された。社会実装に対応するにあたり、技術部構成員が保持するスキルについて、新たに見えてくる化するための取り組みが紹介された。



図2 TC カレッジ 技術職員交流会の様子

4. 施設見学会

技術職員交流会後、Science Tokyo および北海道大学の技術職員の方に対して戸畑キャンパスの施設見学会を実施した。

まず、未来デザインスタジオに訪問してロボットハンド、3D プリンタを利用した取り組みについて説明を受け、続いて、ものづくり支援センターの工作機械、未来テラス、技術部室の基板加工機について、各施設に訪問して説明を受けた。最後に、デザイン工房で技術職員の学生対応について説明を受けた。

施設見学会を通して、本学の社会実装推進、ものづくり支援への取り組みを知っていただき、来学された方と交流を深めることができた。



図3 施設見学会の様子